17　患者の〝心〟を言い当てる

恩師・木村素衛教授（哲学）は生前、よく言われました。「よい質問には、

その中に正しい解答が用意されている」と。いま高齢者のお世話をしていて、その通りだと思い当たる時があります。

ぼけの方の異常な行動は、世話する者が間違っているから起こるものである、という原則を私たちは守っています。ですから、高齢者がどんなことをしても、しかったり、説得したり、逆らったり、口答えしたりはしません。当然、不安や動揺は静まり、異常行動も著しく減少します。しかし、五十人中正常な方は七人、重度痴呆（ちほう）が十三人もいますので、お世話で苦労し、解決できない問題も出てきます。

そういう時、私たちは恩師の「よい質問をせよ」という教えの意味を、ぼけの方にあてはめて考えます。よい質問とは「正しい質問」ということ。正しいとは、ぼけ本人がどうして欲しいと思っているか、それを言い当てることです。例えば、どんなに話しかけても一切見向きもしない重症者に、履歴書で学校の先生だったことを発見した寮母が「先生！」と呼んだら、はじめて応答し出したという報告があります。

病む心を満たすもの――散歩に行って手折って草花で押し花絵をつくりました。年に一度、皆で大作にいどみます。14年続いています。

しかし、ことはそう簡単ではありません。うまくいかない時は、せめてその人の身内ならどう思うだろうか、と少し方向を変えて働きかけます。すると、それが正しい働きかけ、正しい質問であるかどうかを、ぼけの方が態度・応答ではっきり答えてくれます。これがぼけのお世話の仕組みです。

重度のNさんの激しい異常行動が原因で、息子夫婦の離婚騒動となり、Nさんは任運

荘に身を寄せます。けたたましい奇声。物を手当たり次第投げる。寮母にかみつく。腹いっぱい食べていても、トイレットペーパーのかたまった便をするなど、何でも拾い食いします。

数年後、車いす生活となって手が届かなくなると、着物の襟やそで口をほどいて食べ続ける。歌が大好き、金色夜叉は最後まで歌わねばやめません。昔話をしたり、お茶、お菓子をあげスキンシップに努め、ドライブ、旅行に誘う。一時的ですが、落ち着きます。四年目に面会に来た長女が、襟のほころびを食べている悲しい姿を見て、「母が三十二歳の時、父が死に、生活はどん底。捨てられたものを母は拾って私たちに食べさせた。いま拾い食いするのは昔の姿を見るようで、かわいそう」。泣きながらお菓子を小さく割っては食べさせる娘。パクパク求め続ける母。見ていた相談員・三代茂子はハッと気がつきます。その反省を全国大会で述べています。

――福祉とは相手の立場に立ってお世話することです。私はそれをすっかり忘れていました。早速リンゴを買い込み小さく刻み、Nさんの手元に置きまし

た。軍歌を歌いながら食べ続け、なくなると奇声をあげる。急いでリンゴをつぎ足す。糸くずよりもリンゴを食べて欲しい、それが子としての心であるはずです。二カ月して「リンゴをおくれ」と催促します。糸くずとリンゴどちらがよいの、と問うと「そりゃリンゴじゃ」と、はっきりしています。あのひどい奇声は「寮母さん！　寮母さーん！」に変わってきました――。

詳しい経過説明が続きますが、「もし自分がこんな姿となったら、と思うと、いとおしさがこみあげてきます」と結んでいます。三代の問いかけは、Nさんによって正しいと認められたわけです。

三代に代表されるこの寮母たちを、私はつくづく宝と思います。ある来訪者の一行に説明して「寮母は宝です」と言ったら、そばにいた三代が訂正を申し出ました。「私たちの宝はお年寄りです」と。